

## 土間にむしろをしいて ... 寺子屋のようす

小林マサオさん〔女性〕の寺子屋についての思い出です。  
 「(小林さんの通った)この寺子屋は全くの草小屋で、池田農場にまねかれて明治三十一年(1898)に入地した野村慈教さんが、布教のかたわら始めたものです(真宗大谷派本願寺所属説教所の池田仮設学校で今の池田小学校のもとになった:左ページ写真)。

中は地面にヨシをしき、その上にむしろをしいただけのものでした。

座布団もなく、冬は寺子屋の中に火をたいて勉強してい

ました。寒くてかじかむ手をこすりながらの勉強でした。寺子屋での勉強は「ハト・マメ」の読本と手習いで、石板に書いては消し、書いては消して勉強しました。

先生の野村慈教という人はとてもきびしい人で、質問にまちがった返事をする、女の子でもほほを強くたたかれたり、つねられたりもしました。学校の先生はこわいものだと思つづく思つたものです。

冬の吹雪の日は寺子屋に通うのがつらくて、死ぬんでないかと思つたこともありました。」

(「池田町開拓夜話」より)

注:小林さんは165ページの高橋ゆうさんの娘

## こおって足が入らないくつ ... 登下校も大変だった

「道路は馬車のわだちと馬の歩く道以外は草がのび、朝つゆにすそをぬらし、雨の日は泥にまみれての登校でした。

大雪の朝は馬そりで送ってもらい、下校の時は上級生が雪をふんで先頭を歩き、その足あとを下級生が歩いたものです」(堀井忠治さんの話)

「私は当時二年生で一学期まで先輩や姉に連れられて、開拓地の悪路往復十二kmを清見ヶ丘の池田小学校にかよったが、冬の吹雪や深い雪道は馬そりで送り迎えしてもらった。

今のようにゴム長ぐつもなく、防寒ぐつと称するズック(綿布製)のくつで、こおって固くなり足が入らない時、

姉にはかされて帰ってきたことがある。

様舞分教場の開校により通学は楽になり、雪の日は祖父が作ったわらぐつをはいた。わらは年に一、二度買う米俵をほどいて使った」(奥田実太郎さんの話)

「一日の授業が終わると二つの山を登って、我が家へと帰りました。一寸先も見えない原始林、大木の立木、昼でさえキツネやウサギがわが物顔に出て歩いていた時代でした」

(平井トメさんの話)

(東台小学校開校記念誌『東台の灯は消えず』・

様舞小学校開校記念誌『鑽仰』=「池田町開拓夜話」より)

## 十勝へ来る先生も大変だった ... 狩勝峠を馬そりでこえた

佐々木円太さんは、明治40年(1907)に利別尋常高等小学校の先生となりました。

師範学校(先生になる学校)は札幌にありました。佐々木さんは3月30日に列車に乗り、旭川経由で落合(南富良野町)までやってきます。当時はここで、線路が終わっていました。

一泊したあと、佐々木さんは仲間3人で馬そりをたのみ、狩勝峠をこえます。峠はまだ雪が深く、下り坂でそりがひっくり返り、20mくらい雪まみれになって転がりました。

ようやくふもとの新得に着いたら、今度は雪どけ道です。馬そりは苦労しながらペケレベツ駅(清水町)まで着き、ここで一泊しました。

ここから先は、もう馬そりが通れないということで、3

人は歩くことになります。

4月1日、泥にひざまでうまるような悪い道を、カシワの大樹林の中、とぼとぼと歩き続け、やっと夕方に芽室駅へ到着しました。家が14~15軒あって、ようやくホツとしたといえます。

翌日、帯広に行き、河西支庁(今の十勝支庁)であいさつをして注意を受け、一泊します。そして、翌4月3日、汽車に乗って利別に到着しました。

(注:鉄道は明治38年〔1905〕に釧路・帯広間が開通、帯広・落合間は明治40年〔1907〕9月に開通: p184)

(佐々木円太さんの話を意識)

(『利別尋常小学校開校六十周年記念誌』

=「池田町開拓夜話」より)

2 むしろ(籬): わらなどを編んで作った敷物。  
 3 手習い(てならい): 文字を書く練習。読み書きや勉強のことをいう場合もある。

4 石板・石盤(せきばん): 黒い石でできた板で、ろう石というチョークのような道具で文字を書くノートの一種。布でふけば消えるので何度も使えるが、記録はむずかしい。  
 5 わだち(轍): 車輪のふみあと。